

大会講演

かつては中山道の宿場町として知られた熊谷。平成19年8月16日には、気象庁発表で40度9分の暑さを記録した熊谷市での、今年も暑い日の開催でした。

山間の地にあって独得の文化を育み、近年は特に「歌の里」づくりが進められている岐阜県郡上市で、「郡上おどり」最後の日に開かれた短歌大会でした。

NHK学園生涯学習フェスティバル

● 武蔵熊谷短歌大会

と き／平成二十年八月九日（土）

ところ／熊谷市・八木橋カトレアホール

演題 歌を読む楽しみ

講師 小島ゆかり……3

● 古今伝授の里短歌大会

と き／平成二十年九月六日（土）

ところ／郡上市総合文化センター（岐阜県郡上市）

演題 作歌の補助線

講師 栗木 京子……15

「歌を読む楽しみ」

小島ゆかり

皆さんこんにちは。私は名古屋の生まれ

ですので、暑さにはかなり強いのですが、

熊谷も相当な暑さですね。昨夜、予習をし

なければいけないのに、北京オリンピック

の開会式を見てしまい、しかもその前に私

の大好きな「ぼちたま」という番組があっ

てそれもすっかり見てしまって、寝不足気

味。来る列車の中で居眠りをしてしまっ

て、ふっと気がついたら鴻巣だったのだ

です。もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

て、もう少し寝ていたら高崎まで行っ

ると思います。でも、人の歌を読む、古い

歌、近代の歌、現代の歌を読むということ

を熱心になさっている方は意外に少ないの

ではないかと思うのです。

私は三十年くらい歌を作って来ましたが

れど、本当に困った時に、これまで読んで

きた歌の中から自分のリズムとは違うリズ

ムが聞こえてきて教えてもらったり、多く

の先輩たちが作った歌の中で未知の言葉と

出会って、その言葉がまた新しいイメージ

を呼び覚ましてくれたりと、そういういろ

いろなことがあります。

ですから、読むということ、すごく大

事だなあと思うのですね。勉強ということ

ではなくて、読むことによって多くの楽し

い思いをして参りましたし、今もそうです

ので、その楽しさということを話したいと

思います。

対象をよく見つめること

今、いくつかの新聞、雑誌の選をさせて

いただいております。一応、立場上偉そ

うに選をしているわけですが、た

くさんの投稿歌から学ぶことが大変多いの

です。また、慰められたり、勇気づけられ

たり、たまには涙ぐんでしまったりと、そ

ういうこともたくさんあります。

心に残っている、ここ一年くらいの間の

新聞、雑誌の投稿作品を取り上げてお話し

します。

アイウエオ順に唱えてようやくくに貴

女たのなまえ思い出せたの

これを読んだ時に、「ああ、私と同じだ

なあ、この人」と思いました。よく分かっ

ているあの人のために、名前が思い出せない

と言う時に、ア、イ、ウ、エ……と順番に

やっっていくのです。

この歌の魅力というのは、そうした内容の親しみやすさ、面白さに加えて、それを生かすリズムがありますね。

「アイウエオ順に唱えてようやくに」「貴女のなまえ」この表記もなかなか素敵だと思います。この表記を使うことによって、作者名がなくても、もしかしたらこれは女性の作品ではないかなあとか、もしかしたら「貴女」という方は結構親しい間柄の、割と気持ちの中で親しく思っているらしい方、そして、何がしかの信頼とか敬意を持っている方なのではないか。そういうことが表れていますよね。

「思い出せたの」と口語で歌っている。そのことによって、心の中で「貴女」という人に語りかけていくような、自然のリズムが出来るようになっていきます。さりげない歌ですけれども、具体的な内容が自然体のいいリズムによって、すっと心に入ってきて印象に残った歌でした。

体力の限界なりと離農せし最後の苺
届けられたり

これもちよっと感動した歌でした。それ

で、同じ内容であっても、例えば多くはこういうふうになってしまうのではないのでしょうか。「体力の限界ですと書きありて農の友はいちこ届け来」とかね。これは、同じ内容だけど、どうしても説明的になりますね。

この作者は「離農」という言葉を使っています。「農を離れし」とか「農を止めし」なんて言葉はよく出てくるのですけれど、この歌は「離農」と言ったために大変に簡潔な表現になったと思います。

それと「最後の苺」、こういう表現はなかなか難しいことなんですよ。「最後の苺届けられたり」、いいですよ。「最後の苺」という言葉の中に、送ってくださいった方の思いにプラスして、それをいただいた作者の思いもよく表現されています。言葉にして言わないけれど、言わない感情というものがこうした簡潔な表現の中でよく表されているなと思いました。

膝頭に笑顔を見せて擦れちがふ女子
高生のはずむ自転車

若い人が自転車で乗って弾んでいるという歌は結構ありますね。でも、たいていは



笑顔そのものを詠った歌になってしまおうのですが、この作者はちよっとそこを我慢して、もっとよく見ました。もっとよく見たことによって、顔ではなくて膝頭に笑顔を見ているのですね。ここがこの歌をとってもよくしています。想像してみてください。私の家にも娘が二人いますけれども、本当に十代の頃というのは膝もかわいらしくて、ふくよかで滑らかですね。えくぼがあつたりもする、そういう膝です。「膝頭に笑顔を見せて」と、この発見だけでこの歌は生きました。なぜこの発見ができたかというやはり対象をよく見たからです

ね。歌を作る時に、私もそうなのですけれど、意外に見ているようで見ていないのですね。

例えば、コップの水を見ていて、そこに光があつて……、このあたりでもう頭の中の作業に入つてしまふのですね。これをもう少し我慢して、もう少し見つめていれば、常識的な範囲内ではないもつと多くのもの、今、この時の姿が見えてくるはずで、そこが大変大事なところだろうと思います。この歌は、それによって得たたった一つの発見によって、非常に良い歌になつたと思います。

「膝頭に」は字余りですが、この初句の字余りもいいですね。その時の気持ちの勢い、言葉の勢いでバツとリズムが出来て、定型でないほうが却つて魅力的になる場合もたくさんあります。

風呂上り体重測る老妻の理屈をつけ
て一キロ引きぬ

本当に私も全くこの通りで、読んで笑つてしまいました。バスタオルの重さがあるとか、髪を洗ったから重いか、いろいろ理屈をつけて一キロ引いたりする。老妻で

すから年は重ねていても変わらない女性の心理があつて、それを具体的に詠っているんですね。この歌も、アイウエオ順の歌と同じで、内容の面白さはもちろんですが、大事なことだけをすつと言つて、余分なことは言わない。表現が簡潔で、すつと読者に入ってくる。そこところがとてもいいと思いました。

心意気や情愛が伝わる歌

これからも独り静かに生きますとも
古希の日の夜三日月光る

もしもこの歌が、「これからも独り静かに生きますと古希の日の夜三日月光る」であつたら、私はこの歌は取らなかつたと思います。平凡ですからね。でも、「と」のあとに「も」が入つた。たった一音ですが、「これからも独り静かに生きますとも」というふうには、作者は言つたのですね。これが、非常に歌をよくしたと思います。「生きますとも」というような、少し何か心意気を見せたような、ちよつとした言い方の癖というか、女性だろうと思うのですけれどね。「生きますとも」という言い方

によつて、作者像が滲んで見えてきます。「生きますと」と真正面から言われるよりも、読者が受け取る時に何となくおらかな感じがする。そして、ちよつとユーモラスな感じもしますね。その一音がどんなに大事であるかというのを、この歌によつて、教えられた気がしました。

「古希」とか「喜寿」とか、そういう年齢の節目を入れる作品は多いのですけれど、なかなかこれが難しいんですね。「古希」は「古希」の、「喜寿」は「喜寿」の似たような感慨になつてしまふことが多いのです。この歌は内容そのものはそんなに新しいものではありませんけれども、「生きますとも」という一音によつて生きた、そういう作品だと思えます。こういう歌に出会えることも、やはり選をさせていただけるすごい大きな喜びですね。

ツツときて背を立てのびるつぐみつ
ぐみ春の渡りの風を聴くらし

良い歌だなあと思いました。つぐみへの温かい、非常に慈しみある眼差しだなあと思うのですね。この歌の作者は「日本野鳥の会」の会員の方なのです(笑)。私は



います。なぜ、この千本松原を残さないと
いけないかということなのですが、松原が
美しいのはここだけではないからこの千本
松原そのものがものすごく大事ということ
ではない。もつと大事なものは、千本松原
が抱えている雑木林なんだ。雑木林は自然
の循環の拠点なんだ。雑木林があることに
よって鳥が来る。鳥が実を食べる。その実
が鳥の糞と一緒に地面に落ちる。そこから

芽が出る。木が育つ。そして水が綺麗にな
る。その大きな自然の循環、これを考える
と雑木林がどんなに大事か、ということ
言ったのですね。これは牧水の素晴らしい
業績だと思います。

一方、中西悟堂さんは、牧水より少し遅
れますけれども、今よく見かけるピルの屋
上に庭園みたいなものがありますでしょ
う。あれの発案者ですし、一網打尽に鳥を
捕らえる霞網の廃止に尽力したのも中西さ
んです。トキを国際保護鳥にしようと提案
したのも中西さんで、「野鳥の会」の創設
者ですけれど、そのお弟子さんたちの「野
鳥の会」のグループの中に短歌が好きの方
がたくさんいらして、たくさんのお歌が出
てきます。

描写を生かす表現

現代歌人の近刊の歌集から選んだ歌を読
んでいきましょう。最初は大下一真さんの
『即今』という、先月出版されたばかりの
歌集の中からの一首です。

遠くにて褒むるは誰ぞ梅香る庭を掃
きつつひとつくしやみす

この『即今』という歌集なんです、あ
とがきを読んで非常に味わい深いことが書
いてありました。

大下さんは、皆さんご存知かと思うので
すが、鎌倉瑞泉寺の住職です。ですから、
禅僧ということになります。歌集の発行が
七月二日になっていまして、大下さんの還
暦の誕生日だそうです。そして『即今』と
いうタイトルは、禅の教えの中に「即今た
だいまを尊ぶ」というのがあるのだそうで
す。今、このただいま、ですね。生きてい
る今このただいまを尊ぶ。これを、還暦に
なった自分がしみじみと味わうというか、
そういう気持ちで生きる、ということを書
いておられるのです。

私はもうすぐ五十二歳ですけれども、こ
の頃、こういうことをとても感じます。い
ろいろなことがこれまであって、これから
もいろいろなことがあるかもしれない。世
界中にいろいろな危うさがあります。自分
の子供たちはどうなるのだろうか。そして
老いてゆく親たちがいて、そろそろ介護の
時代にも入ってきた。いろんなことを考え
ながら、でも、「ただいま」というこのひ

と時、ひと時を大事にして尊んでいく。こうして皆さんと時間を共にしていることもすごく大事に思う。今朝、電車を乗り越さないでちゃんとここへ到着できたことをすごく大事に思う。そういうことを考えながらいることは、たいへん豊かではないかと思えます。

そういう心境が歌にこういう形で出てきているのは、いかにも大下さんだと思えました。瑞泉寺のお庭は広いですから大変だろうと思いますが、庭を掃いていると梅が香ってくる。まだちよつと寒い季節ですから、くしゃみが出たんですね。くしゃみが出ると、誰かが噂しているのはよく言いますが、大下さんは、即今ただいまを尊んでいますから、「俺のこと、誰か褒めているんじゃないかな？」と思うのですね。どこの誰だろうと。

くしゃみをして、誰かがうわさしながら自分を褒めてくれているんだろうと思える、その心がタイトルと一つになっていると思いますね。

それから、今日の選者でいらしている小高賢さんの最新歌集『眼中の人』からで

す。意中の人ではなくて眼中の人。意中の人と眼中の人とは意味が全然違つてきますからね（笑）。

二十七歳の娘のメール丁寧なことは秋澄むようなさびしさ

これも、なかなかくつときますよね。二十七歳という年齢が事実かもしれないですけど、大変いいと思いますね。今の子はみんなメールしますけれども、おそらく十八歳だったら、二十歳だったら、二十二歳だったら、二十五歳だったら、ちよつとずつ内容が違つてきますね。

今、私の娘は十九歳と二十一歳ですけれども、二十一歳の方はだいぶ落ち着きました。十九歳のほうはまだ「チョーやばい」とか、「うっそー」「きもーい」「うざーい」こんな感じですよ（笑）。

おそらく小高さんのところも、私の家ほど下品じゃないにしても、現代のお嬢さんですから、年齢の若い時にはお父さんが「どうだ」って言っても「普通」、「きもい」、「お父さん、うざい」という感じでメールが来たかもしれない。それが就職をして、二十七歳という年齢になって、お父さんが

何か言つてやると、「分かりました」とかね、そんなふうには返事が来る。それはいいことではあるのですけれど、「きもい」「うざい」と言われていた時よりも、ちよつと娘が遠くなったような気がする。これは多くの親が思い当たるようなことではないでしょうか。

「秋澄むようなさびしさ」ですから、寂しさを比喩しているんですね。寂しきの質はどんな質だといつたら、春の夕暮れの寂しさではない。夏の明け方の寂しさでもない。言うなれば、秋が澄むようなそんな寂しさだと。お父さんの娘に対する微妙な、複雑な気持ちを「秋澄むようなさびしさ」といつている。単純な表現のようですけど、優れた表現だと思えました。

次の歌は日高堯子さんの歌ですが、「睡蓮記」という、これもまだ出て間もない歌集です。

真間川の底に春の藻がめぶき紐のやうなる水がやはらか

とても女性らしいリズムが柔らかい歌ですね。私は西東京市に住んでいます、西東京市というのはどこだと思つていらっ

しゃる方もいるかもしれませんが、旧田無市と保谷市が合併して西東京市になったのです。とんでもない付け方でしょう。

京の都の東のほうなので東京ですが、それに西をつけた。京の東の東京のその西というのは一体どこなのだと思います。それはともかくとして、近くには川があつて、今年の春、散歩していたらこの歌と同じように水が柔らかく、川面からちよつと藻が出ていて、これがすごく柔らかなびいているのです。そこでなんとカルガモの子供たちが並んで滑り台をやっているのを見たんですよ。可愛かつたですよ。ちゃんと並んで何度も何度もやっていました。それを親らしいちよつと大きいカモが、少し離れたところで浮いて様子を見るともなく見ている。そんな風景を見て、本当に心が和みましました。そのことを思い出しながらこの歌を読みました。

真間川は手児奈の伝説があつたり、北原白秋が江口章子さんと新生活を始めた葛飾のあの辺りですね。日高さんは非常によく見ているなと思いました。普通だったら、「真間川の底に春の藻がめぶき」ときたら、

その藻が「紐のやうなる」とやつてしまひ
そうですよ。けれども、もう少しく見
たことによつて、藻の間をひだを作るよう
にして流れていく、その水が紐のやうだと
表現した。春の藻が紐のやうだと言われた
時と、水が紐のやうだと言われた時の新鮮
さつて、違いますでしょう。描写の力が優
れているな、と思います。

そして、この歌を読んですぐに思い出し
た俳句があるのです。高浜虚子の句で、私
の好きな句ですが、「白酒の紐のごとくに
注がれけり」というのがあります。白
酒つてちよつとトロツとしていますでしょ
う。白酒を注ぐ時はそんな勢いよく注ぎま
せん。そつと優しい所作で注ぎますと、濃
度のある白い白酒がトロトロトロとい
う感じですね。それを、「紐のごとくに注が
れけり」と表現したんですね。若い頃はろ
くに高浜虚子を読みもしないで、頭から客
観写生の生真面目な面白くもないおじさん
だらうと決め込んでいて、大変失礼なこと
をしてしまった。最近になって高浜虚子の
作品をたくさんたくさん読むと、あの客観
写生を突き抜けていった時に広がってくる

混沌とした大きな世界があるということに
気付いて、申し訳ございませんでしたとい
う感じなのです。日高さんがこの句をご存
知だったかどうかはわかりませんが、ご存
知でも、ご存知であつてもなくてもいいですよ
ね。これは、日高さんだけの歌になつてい
ると思います。

結句の「紐のやうなる水がやはらか」と
いう止め方、ある言葉の途中で止めるよう
な作り方です。若い人はよくなさいませ
けれど、これは注意しないと、しりきれト
ンボみたいになつてしまつて、うまくいき
にくいのですが、この歌は良く考えられてう
まくいつているなと思いました。

読む楽しみを与える歌

久々湊盈子さんの最新歌集「鬼籠子」と
いう歌集の中の歌です。

微恙得て籠りしのちの目に見ゆるな
んと自由な三月の風

これは、読む楽しみということから言え
ば、このところよく話題になる文語と口語
の混合体の一首ですね。文語体と口語体が
同居していてもいいのですかという質問を

よくされるのですが、この歌を見た時に非常に自然に文体が移行しているなあと思いました。「恙無し」とは元氣のことですから、「恙」というのは体調が悪いんですね。「微恙」ですから、大きな病ではなく、ちよつと体調が悪い程度ですね。

「微恙」は俳句の中では時々出てきますけれども、短歌の中ではあまり用いられない。私の記憶では、例えば伊藤一彦さんにこういう歌があります。「微恙にて人は死なむか微言にて人は生きむか柘榴笑ふな」という歌です。「微恙にて」つまり、微かな病、ほんのちよつとしたことによつて人は死ぬこともあるだろう。反対に、微かな言葉によつて人は生きることもある。「柘榴笑ふな」という歌なんです。これは、長く少年少女の心のカウンセリングに尽力されてきた伊藤さんならではの歌だなあと思うのです。

人間というのはほんのちよつと体調が狂つたり、ほんのちよつとした恙で死んでしまうこともある。そういうふうになつてしまうこともあるけれども、逆に、ほんのちよつとした言葉、誰かに言われたひと

言、あるいは何かで読んだひと言、誰かが作った歌の一首に支えられて、もう一度生きようと、元氣や勇氣を与えられることもあるという歌だろうと思います。

久々湊さんのお舅さんは著名な俳人でいらつしやいましたから、こういう言葉も身近でご存知だったのだらうと思います。「微恙得て籠りしのちの」ですから、ちよつと体調が悪くて、家籠りしていたのだけれども、少し体調が良くなった。体調が悪くて籠もっていた後だから、「なんと自由な三月の風」と感じたのでしょうか。春一番の頃でありますから、ゆるい風ではなくて、むしろ少し渦巻くような風ではないかと想像します。文語中の文語みたくない「見ゆ」という言葉を使つていて、一気にここから「なんと自由な」と口語に展開していったのです。

また、前半には「微恙」なんて固い言葉、漢熟語が用いられているのに、後半には「自由な」という口語調になつていきます。それなのに一首を読んだ時にあんまり違和感がない。この歌を、上の句と同じように「なんと自由なる三月の風」と文語で



もし押し切つてしまつたら、風に重さが出てきてしまいますね。そんなことを思いながら、この文体の展開を読んで、楽しいなあと思いました。

それから、次の歌は、伊藤一彦さんの今年度の追空賞を受賞された『微笑の空』という歌集の中の一詩です。

似よる人いくたりもあゝるみどりこの
かほ 亡き人もひつそりとをり

大変好きな歌です。前後の歌から想像すると、お孫さんだろうと思うんですが、近しい嬰兒でもいい。生まれてそんなに間がない赤ん坊をみんなで覗き込んでいるのですね。あの鼻はおじいちゃんに似ているんじゃないのとか、この目はお母さんに似ているとか、いろいろ言うんですね。

「似よる人」、これは日向弁、宮崎ですね。話題の東国原知事さんのところですよ。まだ宮崎がこんな nationwide になる前に宮崎に行った時に、県庁の人なんか普通に話している時に、「なんとかささん、誰々に似よるね」と言っているのを聴いた記憶があります。「似よる人いくたりもあるみどりごのかほ」のあと一マス空けがありますでしょう。この一マス、一字空けのある歌がだいぶ前からちよつと流行りみたいになっています。あんまりやると軽くなるし、よくないなと思って、私は絶対にここは一字空けでないとだめという時以外、我慢するようにしています。どうしても流行みたいになるとやっちゃんわけですけれども、注意すべきところですね。

しかし、この歌は絶対にここで一マス空けでなければいけない。分かりますでしょう。もし一マス空けがなかったらどうですか。「似よる人いくたりもいるみどりごのかほ」もひつそりとをり」となつて、すごくへんてこな歌になつちゃう。ここは絶対に一マス空けですね。もう一つはリズムの面だけじゃなくて、「みどりごのかほ」ここまでがこの世の人たちですね。そして一マス空けてその後は、亡き人がでてくる。親族が嬰兒を囲んで誰に似よるね、誰に似よるね、と言っている時に、亡くなつたおじいちゃんとかそのまたおばあちゃんとかも、家族の団欒の輪に加わっている。まどいの風景、その中に亡き人もいるというの、とても良いと思います。伊藤さんらしいですね。

内容が面白いでしょう。方言の面白さがあるでしょう。一マスあけの面白さがある。一マスあけの使いどころはここだぞ、というようなことを教えてくれる。そして全体のリズムの良さ。こういう歌が、私に読む楽しみを与えてくれるのです。極端に漢字を減らして、あとはなるべく平仮名を

多くしている。そういう表記も勉強になりますね。

気付く人だけ気付けばいいよ

次の高野公彦さんの歌。歌集「渾円球」、これは最新の歌集ではないですが、まだまだ新しい歌です。

月さして宝石店もその前のポストも
静かなり乱歩の忌

これね、最初に読んだ時、私はゾゾッとしましたね。凄いなあと思つてね。その凄さというのはいくつかあるのですけれども、まずこの歌、月の夜ですよ。月の美しく射している夜です。宝石店がありますよ。その前にポストもあります。静かです。今日は江戸川乱歩の忌日です。なんだかこれから何か事件が起きそうでしょう。そういうような作り方をわざとしているのですね。なぜ何か事件が起きるのではないかと思うのかというと、そう思わせる仕掛けが考えられています。まず、句まがりがありますでしょう。「静かなり」の「静か」と「なり」がばらばらになつて四句と五句にまたがっています。それから、

結句の「なり乱歩の忌」ですが、「なり」と「乱歩の忌」と割れています。これ、句割れですね。四句、五句、下の句で、句またがりとは句割れの手法が使われているのです。そして、「乱歩の忌」ということで、名詞止めになっているんですね。「月さして寶石店もその前のポストも静か乱歩の忌なり」とすればピッタリ定型にいくんですよ。なのに、わざとしない。これでは全然、怖くない。事件も起きそうじゃない。句またがり、句割れにすることによって、「事件が！」なんていうことを思わせるんですね。

高野さんがご著書の中でお書きになっていますが、句またがりというのは、本来、一緒に読むべき言葉が途中で途切れる、切ってしまうために読む側としては一緒に読みたいから、前進、前にのめっていくようなリズムから前進のエネルギーが生まれる、ということを書いていらっしやいます。例えば、「小島ゆか」で止められたら嫌ですよ。やっぱり「り」までちゃんとやって欲しいから、早く「り」を言つてよ、ということになります。それと同じ

で、句またがりがあると、途中で止められた感じがして、前進のエネルギーが生まれてくるというんですね。

句割れはどうだろう。句割れは本来は割れない所で割れるから非常に不穏な感じがしてくる。乱れる感じ。そして最後に生まれるのは余韻ですね。つまり、この歌は句またがりによって前進のエネルギーが生まれ、句割れによって不穏な感じをもたらしています。前進のエネルギーというのはストーリーの展開を予感させるわけでしょう。そして、不穏な感じが句割れによって生まれ、何となく「乱歩」という名前も相俟って、事件が起きるような感じが生まれる。そして、名刺止めによって余韻が残り、その先を想像させる。読者の想像力を掻き立ててくれる。非常によく考えられた緻密な歌ですね。

乱歩をよく知っている人は、もう一つ気付くことがあるでしょう。江戸川乱歩さんが、日本で最初と言つてもいい、日本の推理小説の拠点になった雑誌を作った。この雑誌の名前が『寶石』というのです。これに気が付くと、もつと面白さが出てくるの

です。『寶石』という雑誌は一九四六年に創刊されています。それまで推理小説の書き方の手法すら日本にはなかった。それが、欧米から推理小説が入ってきて、日本でも江戸川乱歩さんを筆頭として推理小説のブームがやってきました。今は本当にすごいですけどね。その最初の拠点になったのが『寶石』という雑誌です。

いくつもの面白さが仕掛けられているけれども、作者はそれを表立っては言わないですね。言わないで、気付く人だけ気付けばいいよとこの作品の陰で作者はほくそ笑んでいる。これがまた乱歩的なのですね。この歌には、そういういくつもの楽しみがあります。

現代歌人の最後の歌。山笠井喜美枝さんの『じふいち』これも、比較的新しい歌集です。

幼児のごとはつたりと転びたり後期高齢者の具体例とし

山笠井さんはすこくてね、この「後期高齢者」という言葉が、まだ注目を浴びていない、ちよつとこの言葉が出たかどうかという頃に、もうこの言葉をいち早く使つて



歌を作っている。しかも、さりげなく詠みながら、実は非常に痛烈な皮肉でしょう。小さい子は、ボタンと転ぶのですね。転び方まで可愛い。でもだんだん大きくなるにしたがって、手で支えたり、肘が出たりする。だんだん転ばなくなる。ところが、またある年代を過ぎると、ちよつと躓いたりして転んで、そのうちだんだん手が出るのが遅くなつて、小さい子のようにハツタリと転ぶようになるのですね。それを、「私、後期高齢者だから」という。

非常に皮肉をこめて、皮肉だけれども、

意地悪な感じではない。むしろ、ユーモラスですね。皮肉とユーモアがひとつになっているような、そんな感じで歌が出来ているのですね。「後期高齢者」という命名をした人に、この歌を是非とも見てもらいたいですよ。

千年前も心は同じ!?

最後に、八月の熊谷は暑いので、やっぱり涼しくありたいと思い、物の怪の歌を読んでみます。

今年は源氏物語千年紀で、あちこちで源氏物語に関する催しがあります。私は専門家ではなくて、ただちよびちよびと読んでいる程度ですけれども、時々、源氏物語の話をもとに先生に教えていただいたりする機会があります。源氏物語の中には歌が七百九十五首あります。物の怪といえは皆さんお分かりでしょうけれども、六条の御息所ですね。六条の御息所の歌は九首入っています。プラス、作者・物の怪として二首入っている。これは何故か歌の下に「御息所」じゃなくて「物の怪」と書いてある。この二首の物の怪の歌に、私はすごく

興味があります。一首目の歌というのはご存知、葵の巻で正妻の葵上が男の子夕霧を出産する時に、六条の御息所の生霊が出て取り憑いて、葵上を祟り殺してしまうという場面。そこが一番有名なのですけれども、光源氏二十二歳、六条の御息所二十九歳ですね。二首目の歌は、それからほぼ二十年後です。光源氏が四十一歳で、もう御息所は亡くなっています。ですから、今度のは死霊です。

わが身こそあらぬさまなれそれながら
らそらおほれする君は君なり

これは怖い歌なんです。どこに出てくるかというと、若菜の巻の「下」に出てきます。どういう場面が出てくるかというと、光源氏が最も愛したといわれる紫の上に崇ってくる。けれども、もう、光源氏が最初に物の怪を見てから、二十年の歳月が流れているんですよ。ですから、その物の怪があの人みたいだなあと思っても、にわかには信じられない。当時は、狐などが悪さをするということが言い伝えられていたそうですから、本当にあなたなのか。もし本当にあなたなら、あなたと私としか知

らないことを言ってみよ、と言うのですね。ここがすごく面白いのですけれどね。そうすると、物の怪が「あらまあ、分かっているくせに」と。

そして「私の身はこんなに変わり果ててしまいましたけれども、あなたのほうは依然として前と同じような美しいお姿でこの世に生きていらして、前と同じようにそらとほけていらっしやるわね。わかつていらっしやるくせに」と。生前も、私の気持ちには分かっていたくせに、いつでもとほけて逃げていた、とそういう意味も込められているかと思うのです。「あらまあ、前と同じようにそらとほけていらっしやること」とというのが、「そらおぼれる君は君なり」という歌なのです。

この物の怪に「何で出てきたのか」と言うとうと、物の怪が言うんですね。「生前にあなたが私に冷たかったとか、そんなことはもういいんです。もうそんなことは過ぎたことです。私が今ここに出てきたのは、あなた、この間、紫の上との寝物語で私の悪口言ったでしょう」とそう言うのですよ（笑）。確かにそうなんです。

この物の怪が出てくる少し前の場面で、光源氏が紫の上に、過去に関係した女性たちのことをいろいろと語る場面があるので。もてる男性はよくこういうことをするのでですね。紫の上に「あの六条の御息所という方は、大変気品があつて家柄もよく、本当に一緒にいるとこちらが恥ずかしくなるほど優雅な方でいらっしやいました。ですけれども、堅苦しくて一緒にいるのは何となく気詰まりで、あんまり会いたくなくかつた」みたいなことを（笑）、言っているのです。

それを物の怪さんが、聞いていたわけですね。それで、「あら、まあ」というので出てきて本当はあなたに取り憑きたかったけれど、どうもあなたは仏の加護があつくて取り憑けない。そんなことがあるのですね（笑）。それで、紫の上に取り憑いたと。これが、二十年後に死霊となつて出てきた物の怪なんです。で、生霊の時の歌というのは簡単にだけ言いますけれど、

なげきわび空に乱るるわが魂を結び
とどめよしたがひのつま

嘆きのあまりこんな姿になつて出てきて

しまった私。どうか私の魂を元の体に返すためのおまじないのようなことをしてください、という、そういう歌ですね。

一首目と二首目を読み比べて、「ああ」と思つたのは、物の怪も年を取るとずいぶんふてぶてしくなるもんだなあ（笑）。物の怪すらもこういうふうにな年を重ねるのかなあと思つて、ちよつとびっくりしました。しかも歌として非常に面白いと思つたんですが、この歌が源氏物語にただ二首入っている物の怪の歌として出てきます。

学生さんたちにも私はよく言つていきます。決して元カレの悪口とか、元カノの悪口などを今の恋人に言つてはいけません。後でとんでもないことになりますよ、と。けれども、そんなことを源氏物語の時代にも書いているというのはすごいなあと思つてます。

最後は、物の怪の歌でしたが、今日は一般の投稿から、年を取つた物の怪の歌まで、私が読む楽しみを存分に味わつた作品をご紹介します。